言語と文化的背景

――言葉から見た中, 日文化――

Language and Its Cultural Context: China and Japan Compared

HUI WANG
王　　輝

序論

山本（1982）が指摘するように，言語は，文化の凝縮であり，文化と密接に関連している。石井・久米・遠山（2001）によれば，文化とは，人間が，物事の解釈や行動において拠り所となる「判断基準」であり，特定の状況に対して人々がほとんど無意識に使う「暗黙のルール」であり，生活上の諸問題の解決に向かう行動において「司令塔」の役割を果たしている。そのため，人々がコミュニケーションを交わすとき，その行動は文化によって大きな影響を受けていることになる。したがって，生きたコミュニケーションの流れの中での言語を考察することによって，その言語を話す人々の文化的背景が窺われる。本稿では，言語と文化の関係という視点に立ちながら，中国語と日本語の言語表現の相違，および中国文化と日本文化の相違について考察していく。

中国人と日本人の思考様式

異なった発展歴史や社会生活を経験した各国民及び民族は，異なる価値観や思考様式を持っている。また，価値観や思考様式の特徴は言葉を通して表されている。ここでは，まず中国人と日本人の思考様式にどのような共通点と相違点が存在しているかを明らかにしたい。

1　農耕民族性とマイナス的思考様式

芝垣（1986）によれば，西洋人は狩猟民族性を持っていたのに対して，東洋人は長年農耕民族であった。狩猟民族は猟に出かけるときの状況をゼロとすると，獲物を捕獲するという状況は加算的に考えられる。したがって，西洋人の脳裏に，自然にプラス的思考様式が定着化されるようになった。他方，東洋人は長年にわたって農耕生活を送っていた。農耕民族は 1 年間にほぼ一定する収穫量しか得られなかった。収穫季節ではその量は最高の時点に達する。その後，日々の消費に伴って，その量はだんだんに減少していく。一定の

量の食料が減っていくということが生活の基本姿勢となっていた東洋人には，マイナス的思考様式が形成されるようになった。思考様式の違いは，人々の人生観，行動，言語などへ大きく影響を及ぼす。マイナス的思考様式を持つ東洋人の一つの特徴は，プラス的思考様式を持つ西洋人に反して，物事を肯定的で，積極的に捉えようとするのではなく，否定的で，消極的に捉えようとするのである。

以上では，農耕民族性を持つ中国人と日本人は共に物事を否定的かつ消極的に捉えようとする傾向があると指摘した。しかし，中国と日本の自然環境は大きく異なっているため，中国人と日本人は自然に対して異なった態度が生成してきた。こうした自然に対する態度は人間の思考様式に大きな影響を与えることになる。

2　自然環境と思考様式

日本は四周を広い海に囲まれ，温泉が到るところにあり，山の形もきれいで，海の幸，山の幸が豊かな島である。また，日本は温帯に属し，海洋性国家である。気候は，極端に寒くもなく暑くもないため，とても快適で，住みやすい。たまに地震や台風などの災害があるが，それが過ぎれば，人間と自然が平和に共存できる。日本人は山紫水明の自然環境に恵まれ，欲しいものがあれば，簡単に入手できる。このため，日本人は自然を人間の友として認識し，自然に順応する態度をとり，日の出や日の入，春夏秋冬など自然の変化に従い，農耕を行うようになった。獲物の多少はただ一人の人間に左右されるものではなく，自然という客観的要素によって決められるという考えが日本人の頭に植えつけられた。その結果，日本人は受動かつ消極的性格をもつようになったのである。したがって，日本人はマイナス的思考様式のもっとも強い民族であると言える。

中国の自然条件は日本に比べて相当に厳しいものである。中国は大陸性気候のため，寒暖の差が激しく，旱魃や洪水が多発する。旱魃に見舞われて収穫がよくないことも多い。洪水による災害は人々の家や畑を奪い，人間に死まで強いるケースも珍しくない。こうした苛酷な自然は中国人にとって威厳を感じさせる存在である。一方では，中国人は自然の恐ろしさの中で人間の微力を感じ，物事を消極的に捉えようとし，マイナス的思考様式が形成された。他方では，生き残るため，中国人は常に自然と闘わなければならなかった。自然に勝たなければ欲しいものは獲得できない。つまり，中国人にとって，自然は単なる畏怖の対象ではなく，挑戦の相手でもある。自然と闘うため，一人ひとりの人間は抑え目に行動するのではなく，一人でどれだけ努力できるかが重要になってくる。絶えず自然に挑戦し，自然に勝とうとする強い意志の支配の下で，中国人の積極的，向上的な性格はより表面化された。このように，中国人は積極的な性格が育てられ，物事をプラス的に考える側面をも備えるようになった。

要するに，日本人はマイナス的思考様式を持つものの，中国人はプラス＋マイナス的な思考様式を持っていると言える。言語は文化を背負った存在である。個別言語に特有なものが存在することは，その言語を使う人々は特有な文化的背景を持っているからである。

また，各民族の思考様式は言語の構造を通じて表れている。したがって，言葉が民族文化を区別する重要な要因であると考えられる。中国語と日本語の言語表現の特徴を通して，それぞれの国の文化的背景を窺い知ることができる。以下では，言語と思考様式の関係を出発点とし，中，日文化の共通点と相違点を考察する。

否定的表現とマイナス的思考様式

農耕民族性を持つ日本人，中国人は，否定的表現を多く使用している傾向がある。たとえば，次の英文で肯定的に表現している用例は，中国語と日本語において否定的表現を用いる。

英語：
①Keep off the grass.
②Keep your hands off.
③Keep dry.
④Keep the top side up.
⑤Adults only.
⑥Staff only.

中国語：
①勿踏草地。
②请勿触摸。
③请勿受潮。
④请勿倒置。
⑤未成年者禁止。
⑥无关人员禁止入内。

日本語：
①芝生には立ち入らないでください。
②触らないでください。
③湿気の多い所に置かないでください。
④逆さまにしないでください（あるいは天地無用）。
⑤18歳未満はお断り。
⑥関係者以外は立ち入り禁止。

これらの用例から見ると，英語は肯定的な表現を使うのに対して，中国語と日本語は否定的表現を使用していることは一目瞭然である。無論，英語にも否定的表現を使うという現象が存在している[1]。にもかかわらず，中国語と日本語ほど使用頻度が高くない。中国語と日本語の場合，肯定的に表現できる場合でも否定的な表現を用いるケースが多い（芝垣，

1986)。中国語と日本語には否定的表現が多いという特徴を持っていることは，両国の人々はマイナス的思考様式をもっているからである。前述したように，同じ農耕民族であった日本人と中国人は，収穫後一定の量の食料が徐々に減少していく現実に直面せざるをえなかったため，物事を否定的に扱おうとする傾向が強い。否定的な扱い方を土台として物事を考えている限り，日本人と中国人は日常生活の中で常に物事を否定的に表現することになる。中国語と日本語における否定的表現が多く使用されるという現象は，中国人と日本人の思考様式には共に物事をマイナス的に考えようとする側面が存在することを示している。

上で述べたように，否定的表現を多く用いるということは中国語と日本語の共通している特徴である。しかし，中国人の思考様式にはマイナス的な側面が存在するだけではなく，プラス的な側面をも存在しているのである。中国人の思考様式におけるプラス的側面も同様に言語表現において表されている。したがって，中国語と日本語の言語表現の相違点を分析することによって，中国文化と日本文化の違いを究明することができると考えられる。次は，敬語や言語表現の明確さや客観性などの側面から，中国語と日本語の相違点および中，日文化の相違点を検討する。

敬語と思考様式

1　敬語と日本語

日本語の最も代表的な特徴の一つは敬語が極めて複雑なことである。日本語の敬語は基本的に尊敬語，謙譲語，美化語，丁重語，丁寧語から構成されている[2]。その種類の多さはその複雑さをそのまま表している。敬語というのは，話し手と聞き手，および話題の人物との間のさまざまな関係に基づいて言葉を使い分け，その人間関係を明らかにする表現形式のことである（名柄，1990)。『敬語教育の基本問題』では上下関係と親疎関係について次のように分類している。

上下関係：

①身分の上下関係（おおよそ社会階級のことで，社会体制と密接な関係にある）

②生得的上下関係（年齢の上下がもっとも基本的。各種の社会集団や個人の年齢差による扱いに反映する）

③歴的上下関係（職歴の長短，経験の前後関係。先輩・後輩など）

④役割的上下関係（たとえば，会社などの職階。社長，重役，部長など）

⑤差別的上下関係（合理的な理由は見出しにくい価値観から，人または人の集団を区別する。白人，黒人問題，男尊女卑，その他）

⑥能力的上下関係（指導者の有無など。役割的上下関係と区別がつけにくい）

⑦立場的上下関係（心理的な関係。客―店員，貸す側―借りる側，頼まれる側―頼む

側，教える側―教えられる側，など）

⑧絶対的上下関係（神仏などの宗教的超越者あるいは超自然的存在）

親疎関係：

①心理的親疎関係（対象について親しい感情をもつか否か。友人間，同僚間，近所の者同士の間など）

②社会的親疎関係（血縁的なものと，社会的なもの。身内か否か，同一の職場・所属グループ・地域社会か否かなど）

日常的コミュニケーションを円滑に行うために，日本人はこうした上下関係や親疎関係の違いを判断した上で異なった言語表現を用いている。たとえば，同じ意味の呼称代名詞はいくつかの言い方がある。「わたし」というのは，「わたくし」「あたし」「わし」「ぼく」「おれ」，「あなた」は「貴殿」「あんた」「きみ」「おまえ」などさまざまある。動詞も同様である。「来る」という動詞は，「参る」「いらっしゃる」「おいでになる」などがある。また，日本語では，「お／ご……になる」「お／ご……なさる」「お／ご……くださる」「……てくださる」「お／ご……です」「……れる／られる」「お／ご……する」「お／ご……申し上げる」「お／ご……いただく」「……ていただく」「……てさし上げる」などを用いて動詞を変形させることによって一般動詞を敬語動詞に変えることができる。こうした膨大で複雑な敬語システムが日常生活の中で日本人の無意識のうちに使用されている。学生は先生がいるかどうかを尋ねる場合，①「先生はいらっしゃいますか」と言う。しかし，先生は学生がいるかどうかを聞くとき，②「○○さんはいますか」と聞くのである。また，入社したばかりの鈴木さんのことを述べるとき，③「鈴木さんは本日の会議には欠席です」と言うが，欠席するのは社長である場合，④「社長は本日の会議にはご欠席です」に変わる。つまり，日本語には，呼称代名詞や名詞といった体言および動詞などといった用言の変形を通して形成された複雑な敬語システムが存在している。

2　敬語と中国語

中国人は相手の年齢や身分の違いに基づいて言葉の使い分けをする場合もある。たとえば，

(1)　A 你叫什么名字？（名前は何）
　　B 您贵姓？（お名前は何ですか）

自分より年下の人の年齢を尋ねるとき，Aを使う。目上の人や年寄の人に対して，Bで尋ねるのは普通である。

(2)　A 给我在这儿等着。（ここで待ちなさい）
　　B 请您稍等。（少々お待ちください）

Aは命令的な言い方で，親は子供に対して命令を出すときなど使う。Bは丁寧な言い方

で，目上の人やお客様を話の対象にしている場合に用いる。

このように，中国語にも敬語システムに似たような表現が存在している。とは言え，中国語は日本語のように呼称代名詞がいくつもあるという現象がない。一般的に，「わたし」は“我”，「あなた」は“你”あるいは“您”，「彼」は“他”，「彼女」は“她”と言う。また，中国語では体言や用言の変形などといったシステマティックな敬語系統がない。ここでは，前節で列挙した日本語の用例を中国語でいかに表現するかを考えてみよう。

①，②，③，④の 4 つの用例は中国語においてそれぞれ次のように表現する。

①老师在吗 ？
②○○在吗 ？
③铃木将缺席今天的会议。
④总经理将缺席今天的会议。

すなわち，中国語では学生か先生かに関係なく動詞“在”を使う。また，③と④の場合，新入社員であれ，社長であれ，同じく“缺席”という動詞を用いる。中国人は先生や学生，一般社員や社長の身分区別をあまり考慮していないと言える。

というわけで，中国語の敬語の存在は否定できないが，しかしながら，中国語の中の敬語表現は日本語に比べると，量的にかなり少なく，使用頻度も日本人より遥かに低い。また，上下関係や親疎関係による言葉使いの差異も日本語ほど明瞭かつ精細ではない。

なぜ中国語と日本語は敬語という側面においてこのような違いが出てくるのか。以下では，文化の側面からその理由を探る。

3　敬語と文化的背景

日本は「タテ社会」と言われている。昔から日本人の意識世界に「神→天皇→日本人」という意識構造が根付いていたのである。『古事記』によれば，天皇氏は太陽神である天照大神の直系である。天皇と人民は親と子の関係になる。天皇は文字通り，「天」，言い換えれば，「自然」の存在である。日本人のマイナス的思考によれば，人間は自然に従わなければならない，「自然」が最上位に当たるため，自然を代表する天皇も最上位に当たるのは当然である。歴史的に見れば，天皇の歴史が始まって以来，封建時代の武士の争い，近代の革命，現代化の推進，時代がいかに変わっても，天皇の日本での最高の地位は変わっていない。映画の中，日本の兵士は，死ぬ寸前には最愛の母親や妻子や恋人の名を呼ぶのではなく，「天皇陛下万歳」と叫んで死んだシーンを見た他の国の人は驚かないではいられないだろう。日本人は天皇を日本の象徴として仰いできた。また，天皇だけではなく，日本の昔の将軍や貴族の支配は今も続いていると言っても過言ではない。したがって，日本の上下関係は時代が変化しても，根本的に変わりがなく，比較的固定しているのである。日本人は長年にわたって，こうした決まっている秩序の中で生活し，その上下の分別に慣れてきた。下の人は上の人に絶対服従しなければならない。権力者の前では従順でないと失礼

になる。下の人は上に対して劣等感を持ち，たとえ不満があっても仕方がないと考えている。常に身分の高低や上下関係の中に身を置いている日本人は，強い階層意識が形成されていた。こうした階層意識は言葉の表現によって表れている。つまり，日本人が毎日使っている敬語は日本人の頭の中に根付いた階層意識の表面化である。

中国人のプラス＋マイナス的思考様式は中国人に積極性と消極性といった相対立する性格を与えた。マイナス的であるため，中国人は自然の力を認めざるを得なかった。したがって，自然に対して経験を多く有する人を尊敬する。経験の多少は往々にして年齢の重ねに伴うものであるから，若い人は老人を敬うという上下関係，つまり，タテの関係が形成される。これは中国語の敬語を生成する一つの要因として考えられる。『三字経』に唱えられた“子从父”（子は親に従わなければならぬ）“妇从夫”（妻は夫に従わなければならぬ）の思想はこれを代表するものである。しかし，マイナス的思考様式と同時に中国人の脳裏に確立されたプラス的思考様式が存在している。自然と闘い，自然に勝つため，人の能力が求められる。だが，能力の高低は必ずしも年齢の高低と正的関係をもつわけではない。能力があれば，高位に至ることが可能である。したがって，中国人にとって上下関係は一定的なものではない。このような思考様式のもとで，中国は昔から易姓革命が頻繁に起こっていた。中国では，時代の変化に伴い，国の最高位にいる者が変わる。秦王朝の皇帝は「嬴政」というが，漢の皇帝は「劉」の苗字で，隋は「楊」，唐は「李」，宋は「趙」……といった具合である。王朝の交替は革命を起こすことを意味する。旧政権を徹底的に倒し，新たな社会の上下関係が形成されることになる。旧政権を潰すには血縁によって結ばれた家族の力だけでは足りなくなり，出身地縁，同一幇の縁によるヨコの関係の確立を通して勢力を拡大することが必要になる。こうして結ばれたヨコの関係は中国人に平等の意識を与え，中国人の階層意識を稀薄化した。さらに，近代に入ってから，「男女同権」や「人間の平等」という思想の宣伝によってもその拍車をかける。このような歴史の中，中国人の脳裏に絶対的な「最上位」がない，上下関係が常に変化するものであるという意識が深まっていった。中国人は，今自分が弱い立場にいるかもしれないが，いつか変わる可能性があるという認識が強い。こうした歴史や文化の影響で，中国人は強い階層意識をもっていないのである。上下関係が重要視されていないため，中国人は日常のコミュニケーションの中で，常に上下関係を配慮する必要がなくなり，言葉の使い分けをする必要性が低くなる。そのため，中国語には日本語のようなシステマティックな敬語システムが見られないのである。

言葉の明確さと思考様式

1　日本語の曖昧性と中国語の明確性

日本語は曖昧性が高いとよく言われている。日本語の曖昧性といえば，私はすぐに日本に来たばかりの頃のあることを思い出す。ある日私は自分の書いた研究レポートを指導の

先生に見せた。先生は読んだあと，私に「いいじゃないでしょうか，また頑張ってくださいね。」と言ってくれた。当時日本語をあまり話せなかった私はとても戸惑った。良いのか，それとも良くないのか，がわからなかったのである。日本で何回も学会や研究会に参加したことがある。問題を議論するとき，日本人の発言を聞くと，「……と考えられないとは言えないのではないでしょうか」というような表現はよく耳にする。日本人の報告の中，結論を述べるとき，しばしば「……かもしれない」，「……だろう」，「……であるが……，しかし」などが使われている。それを使うと，黒くもなく白くもなく，肯定でもなければ完全な否定でもなくなる。日常生活の中でも，日本人はよく曖昧な言い方をするという傾向が見られている。次の身近な会話を日本語と中国語のそれぞれにおいてどのように表現するかを見てみよう。

日本語：
　Aさん：鈴木さんは今日来ますか。
　Bさん：来ないらしい。
中国語：
　Aさん：铃木今天来吗 ？（鈴木さんは今日来ますか。）
　Bさん：不来。（来ないです。）

つまり，中国語では，「来ないらしい」ではなく，「来ないです」と言うのである。日本人は「来ない」の次に「らしい」という言葉を加える。「らしい」は遠まわしな断定の意味を表す[3]。鈴木さんは来るか否かはBさんのコントロールの範囲を超えるものであるため，「らしい」を付け加えることによって，話し手の推量は事実からはずれる余地が残されている。日本人はこのように，明確な言い方を避けようとして，判断や決定を言葉の力で曖昧にしてしまうのである。逆に，中国人の場合，「イエス」か「ノー」か，をはっきり言うのは普通である。すなわち，中国人は，自分の論点や観点を述べるとき，明確で断定的な言い方を用いる。

日本語の曖昧性と中国語の明確性は動詞の使用においてもその特徴は顕著である。中国語，日本語の用例を挙げておく。

①顺便把钢笔拿过来。（ついでにペンを持ってきてください。）
②她背着书包出去了。（彼女はカバンを持って出かけた。）
③有家。（家を持つ。）
④行李太重，一个人提不动。（荷物が重すぎるので，一人で持てない。）

下線を付けたところは動詞である。日本語では4つの用例がすべて持つという動詞を使っているが，中国語では，“拿”“背”“有”“提”といった異なった動詞が用いられている。①ペンを持つという動作は，手を使ってペンをしっかり握るため“拿”。②カバンを持つのは，肩に掛けて，身に付けるという状態になるから“背”。③家を持つということは，家が

ある人に所属している。そこで“有”。④荷物を持つというのは，手を使ってものを下から上へ引っ張るという動作から始まるので，“提”で表す。このような例はほかにも多数存在している。たとえば，餃子を作ることを，中国人は“包饺子”（餃子を包む）と言う。この言い方は餃子の作り方から由来すると考えられる。餃子の皮を使って餃子の具を包むようにして仕上げるので，“包”を使うわけである。「サッカーをする」という日本語は中国語に訳すと，“踢球”になる。“踢”は足で蹴るという意味で，サッカーというスポーツの基本動作を生々しく表現している。これらの言葉の面から見ると，中国語は抽象的な概念を極めて具体的で，明確的に表す特徴を持つと言える。

２　集団主義 vs 家族主義

上述したように，日本語と中国語はそれぞれ曖昧性と明確性といった異なった特徴を持っている。これは言語というものは文化から大きな影響を受けていることの証である。中国人と日本人は古くから農耕生活を送っていた。農業機械が未発達の古代において，土地の開墾にはたくさんの人々が協力し合って行う必要がある。収穫するときにも，獲得した穀物は集団のものであった。そこで，「集団」という概念が強調されていたのである。こういう生活様式の中，中国人と日本人の脳裏に集団意識が培われるようになった。

しかし，中国人のもつプラス＋マイナス的思考様式と日本人のもつマイナス的思考様式は異なるため，中国人と日本人は集団という概念に対する認識も全く同一のものではない。日本の集団は主に村落を単位としているが，中国は殷時代から近代までおよそ四千年の間，家族が社会の基本細胞であった。次は思考様式と関連づけて，日本人の集団意識と中国人の集団意識及び言葉表現との関係を詳しく検討していく。

⑴　集団主義と日本語の曖昧性

日本の村落には強い閉鎖性と排他性がある（陸，2001）。これは，日本は島国であるため，土地が狭く，利用できる物質が少ないという自然条件のもとで農地の余裕の如何によることが指摘されている（河辺，2002）。閉鎖性と排他性が高ければ高いほど，個体はある集団（村落）から別の集団（村落）へ移動する可能性が低くなる。そのため，個体は一定の集団の中で生き残らなければならなかった。個体は常に集団の利益を至上のものとして考えせざるを得なかった。このような生活行動方式の中，日本人は自己を中心に判断を行うのではなく，他人との調和を重視し，他人の立場に従うような消極かつ順応の態度をとる。その結果，日本の集団ははっきりした共同意識をもつ厳密な共同体として築き上げられた。共同体の中，個人は行動する場合，集団全体や集団の他人との衝突を避けるため，常に集団全体のことあるいは同じ共同体に属する他のメンバーのことを配慮する必要がある。結果として，日本人は，他人との関わりあいの中でできる限り葛藤を回避しようとし，明瞭で，断定的な言い方をしないような言語構造が確立されたのである。

⑵　家族主義と中国語の明確性

他方，中国の場合，家族は社会の基本単位である。中国人の考えている集団は家族集団で

ある。家族は血縁によって結ばれた共同体で,それぞれの家庭の人々は，家族の利益のため行動し,家族全体の利益に従わなければならなかった。中国の封建家長制はその代表的なものである。家長は家族全体を統率する権力を持っている。家族メンバーは家長の指示した通りに行動する。この意味で，中国人も「集団主義」を持っているのである。だが,「集団」に対する認識は日本人と異なり,「家族集団」である。したがって,中国人の「集団主義」は「家族主義」であるといったほうがより適切であろう。家族集団における「個」の概念は「家族全体」の概念に埋没し,「個」は「家族全体」の利益を代表する家長の命令に服従しなければならない。ここでの順応性は中国人のマイナス的思考様式の表れと考えられる。

しかし，中国人がプラス的思考様式ももつことは決して無視することができない。中国集団の開放性や“光宗耀祖”（祖先の名を揚げる),“任用贤明”（賢明で有能な人材を起用する）の潜在意識は中国人のプラス的思考様式にも大きく関わっている。中国の家族は，社会の基本単位であったにもかかわらず，農耕作業が生存を維持するための主な食料の源であった古代において，やはりいくつかの家族が協力して行動する必要があった。このため，家族の範囲より大きく広がった地縁共同体，すなわち，村落が形成された。しかし，中国の村落は日本の村落のような厳密性と共同意識を備えていない。人々の行動基準は村落の利益よりも，むしろ家族を守るためであり，家族の利益を最大限にすることである。各家族の共同利益が一致すれば，大きな凝集力が形成される。逆に，各家族の利益が矛盾すると，家族間の争いが起きる可能性も避けられない。ほかの家族との紛争が発生し，今の所属している村落にいられない場合，他の村落に移る。一般的に，他の村落は新移入者に対して，歓迎的な態度を取っていた。博大の国土を持つ中国では，農地が足りなかったというわけではなく，農耕に従事する労働力が不足していたためである。こうした自然環境は中国の集団の流動性を培う土壌となっていた。中国語には“惹不起，躲得起”（ここで紛争に勝てないなら，ほかのところに行って，紛争を避ける),“树挪死，人挪活”（木は移し変えると枯れてしまうが,人は環境が変わると新生面がひらけてくるという意味である）などのことわざがある。これらの言葉も中国人の集団に対する認識を反映するものであり，中国人の積極性を反映するものでもある。要するに，中国の家族を基礎とする各種集団は排他的かつ閉鎖的ではなく，開放性と移入／移出の自由性が極めて高い。開放性と自由性が高くなるに伴い，中国人の集団意識が薄くなり，集団全体の利益あるいは集団の他の構成員の利益に配慮し，衝突を回避する必要が少なくなり,「個」に属する空間が残されることになる。それゆえ，中国のほとんどの人がほとんどの場合，ほとんどのことについて「イエス」か「ノー」か，とはっきり言う。もちろん，意見が分岐しているとき，互いに譲れないとき，喧嘩になることはしばしばある。しかし,“不打不成交”（中国の熟語で，喧嘩しないと，友にならないという意味である),それによってかえって相手の性格や，観点が理解できるので，親しくなる。すなわち，中国人は自分を抑えたりする必要がなく，自分の考えをありのままに言い出し，明瞭な表現を用いるのである。

そして，中国語の明確性という言語特性は家族主義から生まれてきた中国人の“光宗耀

祖”（祖先の名を揚げる），“任用賢明”（賢明で有能な人材を起用する）の潜在意識にも大きく関わっている。中国人は個人の成功や失敗，栄誉や恥辱を家族全体と切り離せないのである。“光宗耀祖”のために，すなわち家族のために，個人は一生懸命努力し，栄誉と成功を追求するのである。このほか，中国には昔から地位，種族と関係なく，有能であれば，指導者の高位に選抜されるという事例が数多くある。“任用賢明”という思考方式は人々の競争心，自己表現欲を激発させ，個人の成功が重要視されるようになった。「個」を重要視することはプラス的思考様式によるものとして考えられる。個人の成功や栄誉を求めている一方，集団の利益や他人の利益を見逃してしまうのである。集団や他人のことを考慮しない結果，中国人は話をするとき，自分の考え方を明確かつ端的に述べようとするのである。このため，中国人は個人主義のように思われるかもしれない。しかし，中国人の個人主義は単なる個人の利益を求めるのではなく，その裏には「家族」の利益が出発点としているのである。すなわち，中国人の個人主義は家族という集団の中での個人主義である。これは日本の個人主義が許されない「集団主義」とは異なっており，西洋人の「個人主義」とも違う。中国人の「個」を認めながら「集団」を強調する「家族主義」は中国人プラス＋マイナス的思考様式の真実の描写である[4]。

客観的表現と主観的表現

1　日本語の客観性とマイナス的思考様式

日本語は客観性に富んでいる。「……ことになる」「……でしょう」「聞くところによると……」「……そうです」などの表現は頻繁に使用されている。ある大学の入試試験に失敗した学生は「不合格になりました」と友人に伝えた。日本語の教科書では，「なる」は自然形成の動作をあらわし，動作の主体者とは関係ないと書かれている。しかし，不合格という事実は動作の主体者と必ず何らかの関係があり，自然的に形成された結果とは考えにくい。なぜ日本人は自分の努力が不足であったという事実を認めないのだろうか。実際，日本人が「不合格になりました」というのは，主観の原因を認めないわけではなく，本人は合格できなかった原因を分からないことを意味しているのである。また，日本の天気予報を聞くと，「明日は台風14号の影響で，関東地方は大雨になる見込みです」，「明日は晴れでしょう」のように放送されている。日本の天気予報の正確率を見ると，「見込み」や「でしょう」を付ける必要がない。なぜ日本人はこうした責任回避的な言い方をするのだろうか。「見込み」や「でしょう」を加えることは未来の天気の予測は100％正確とは限らない。日本人は不確実な要素を考慮する傾向が強く，まだはずれる可能性が存在するので，はずれる余地を残しておくことが不可欠であると考えているのだろう。こうした日本語の表現から見ると，日本語は主観的要素を排除し，客観的要素を強調する特徴をもっているのである。これは日本人のマイナス的思考様式と大きく関連している。日本人は，自然に従い，自然に妥協しながら，自然と共存してきたため，物事を決めるのは人間という主観的要素

ではなく，自然という客観的要素であるという認識が強い。このような認識に支配される日本人は，話し手の主観的意志を完全に排除し，超然として物事に介入しない客観的な態度を取り，常に客観的表現を使うようになる。

2　中国語の主観性とプラス＋マイナス的思考様式

中国語にも客観的表現が見られている。たとえば，“他被打了”（彼は殴られた）。“被”を用いることによって，このセンテンスは受動的になり，述べるのは彼が殴られたという事実だけである。このように，中国人も客観的表現を使っていることを否定できない。しかし，この用例を会話の中に置くと，話し手は「彼は殴られた」といった後，聞き手はすぐに「だれに」という返事をし，会話を展開する。ここでは，動作の主体が強調される。また，中国の天気予報では「明日は台風14号の影響で，関東地方は大雨になる」「明日は晴れだ」というような表現を用いる。このように，中国人は客観的表現よりも，むしろ主観的表現を好む傾向が見られている。こうした言語表現の特徴は言語構造の裏に隠された中国人のプラス＋マイナス的思考様式によるものと考えられる。中国人は，一方では，自然という客観的要素の力を認め，物事を客観的に評価する。他方では，人間は自然との戦いの中で存在しているため，人間の主観性を強調し，主観的要素が物事を決めるには重要な役割を果たしていると考えている。中国人はこの思考様式のもとで，主観性の強い言葉表現を使い，積極性を出そうとしているのである。

結論

以上では，言語と文化の関わりという視点から，中国語と日本語の言語特徴の相違及びそれの背景にある中国人と日本人の文化的相違について考察してきた。本稿において，敬語や言語表現の明確さや客観性などの側面から日本語と中国語のそれぞれの特徴を概説した。表 1 はそれをまとめるものである。

表 1：言語表現における中国語と日本語の特徴

中国語	日本語
否定的表現が多い	否定的表現が多い
システマティックな敬語システムが存在しない	システマティックな敬語システムが存在する
明確性が高い	曖昧性が高い
主観的表現が多い	客観的表現が多い

言語の構造は各民族の特有の文化背景の下で築き上げられたものである。各民族の文化の特徴は言語表現の差異によって表されている。言うまでもなく，中国語と日本語の言語表現における相違点は，中国文化と日本文化にたくさんの相違点が存在していることを表明している。表 2 はこれらの差異を示しているものである。

表２：中国人と日本人の文化的背景における相違点

中国人	日本人
プラス＋マイナス的思考様式 階層意識が薄い 家族主義 主観的意志を重視	マイナス的思考様式 階層意識が強い 集団主義 客観的要素を重視

言語は文化を伝える手段や媒介だけではなく，言語自体はその言語を話す人々の思考様式や価値観といった文化の情報を蓄えているものである。言語と文化は互いに切り離すことのできない関係にある。言語は文化の中に融けこんで，文化の一部を形成し，文化を反映しているのである。したがって，ある言語を学ぶ際，その言語を使う民族の文化に触ることが避けられない。このため，言語を学ぶことは，言葉だけではなく，その言葉を話す民族の文化まで理解することは不可欠である。

注

1. たとえば，No Smoking のような No を文頭にする禁止的表現。
2. 『講座日本語と日本語教育：日本語の文字・表記』を参照。
3. 『新選国語辞典』p. 1112 を参照。
4. 中国人の積極的な特性を強調し，中国民族の本質は狩猟民族であるという見方をもつ論者もいる。たとえば，孔（1997）。

参考文献

山本七平（1982）.「日本人と外国語」『国際交流と言語文化』企業内語学教育研究会編，語研.
石井敏・久米昭元・遠山淳（2001）.『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』有斐閣.
芝垣哲夫（1986）.『言語と文化の構造』創元社.
金田一京助・佐伯梅友・大石初大郎編（1973）.『新選国語辞典 新版』小学館.
陸慶和（2001）. 澤谷敏行・春木伸輔・切通しのぶ訳『こんな中国人こんな日本人：ひとりの中国人教師から見た中国と日本』関西学院大学出版会.
河辺利夫（2002）.『アジアするこころ：異文化理解のあり方』玉川大学出版部.
孔健（1997）.『がんこな中国人とあいまいな日本人』PHP 研究所.
宮地裕（1989）.『講座日本語と日本語教育：日本語の文字・表記』明治書院.
名柄迪（1990）.『敬語』荒竹出版.
国立国語研究所著（1990）.『敬語教育の基本問題』国立国語研究所.
上野恵司（1997）.『ことばの文化背景』白帝社.
金佩華（1996）.『中国的郷に入りて郷に従わず』白帝社.
松本一男（1987）.『中国人と日本人』サイマル出版会.
顾耀明（1996）.『标准日本语语法』高等教育出版社.
天津外国语学院汉学院编（1997）.『汉语文化研究论集』天津社会科学出版.